

本日の聖書箇所には、全身が重い皮膚病に覆われている人、中風を患っている人が登場していて、イエスは重い皮膚病の人に「清くなる」ように宣言して、実際にその身体に触れて皮膚病を癒されています。中風の人には「罪が赦された」と宣言したことで、中風の病が治り、自分一人の力で立ち上がり、神を賛美しながら家に帰っていったのです。当時の重い皮膚病は強い伝染力があって、なおかつ遺伝するものと考えられていたので、病者は感染を防ぐために、自分に近づかないように公の場で「私は汚れています」と言って、他の人々が自分に近づかないように警告する必要があったのです。

ですから、イエスに救いを求めてきたこの人は、それだけで当時の律法に違反していたのです。そのような人物にイエスは手を伸ばして直に触れて癒すのです。そして、律法の定めに従って祭司に献げ物をするように指示していることからわかるように、社会的に重い皮膚病が治ったことを公に認められるように導いているのです。ここには、律法の定めを越えて神の愛を示されたイエスの姿があります。また、中風の人を癒すために、イエスは「あなたの罪は許された」と宣言することで、罪の結果として中風の病にかかっていると当時考えられていた人が自力で立ち上がり、自分の家に帰ることができるようになりました。自分の家に帰ることができたということは、彼がユダヤ教の社会に復帰したことを示しています。その人自身の罪によって健康が害されていると考えられ、しかもその罪を赦すことができるのは神以外にないと信じられていた時代に、イエスは罪の赦しを宣言したのです。

重い皮膚病の人も、中風の人も、いずれも「汚れ」と「罪」というそれぞれの理由によって、ユダヤ教の共同体から断絶させられていた人物です。二人とも、ユダヤ教の共同体から疎外¹されていたわけで、その意味で彼ら二人は社会的な病の状態に追い込まれていたのです。けれども、イエスの癒しの物語はユダヤ教社会に復帰させる癒しの行為と理解しがちですが、見方を変えれば、汚れや罪という概念によって一部の人たちを自分たちの社会から排除していたユダヤ教の社会が病んでいたともいえるのです。

日本でも最近、岸田首相の秘書官がLGBTに対する拒否感をオフレコの記者会見で発言したことで更迭されましたが、こういう意識がいまだにあるという日本社会の深層を反映しているのです。自分がLGBTでないことを理由に、嫌悪感を公の人物がたとえオフレコであっても発言するということは、自分の立ち位置が全然わかっていないということです。このことに関連して思われることは、A宮家に関する批判報道が娘の結婚問題を含めて、いろいろと暴露的に報道されてきた事実です。報道が出るたびに思われることは、日本の聖と俗の意識の問題です。天皇（制）に関する報道には聖なる存在に対する自己規制が働いているのですが、その弟に対するゴシップ報道は、聖なる存在である天皇（制）に対してゴシップ的に報道できないことに対する日本人の屈折した意識が反映されているように思われます。これはイエスの時代のユダヤ教社会とは異なっているのですが、似たような民衆の意識が根底にあるように思えて仕方がないのです。

キリスト教の宗派の中には、奇跡的な癒しの業を前面に押し出している教会や教派もあります。それは聖書に描かれているイエスの癒しの活動部分だけに焦点を当ててキリスト教の宣教を捉えているために起こる現象です。イエスが癒しの業をされる現場がどういう状態なのかを全く検証しないで、癒しの業が実際に行われることがキリスト教の神髄であるかのように単純にとらえてしまうと、社会が抱えている問題のことを考慮しないで、自分の立ち位置も考えない

で信仰を捉えてしまう結果、そのようなことが起こってしまうのです。A宮家の批判のユーチューブを見たわけではないのですが、それをユーチューブで得々と話している人の発言を見ると、自分はこの日本社会でどの立ち位置にいて、物事に対して発言しているのかと考えさせられます。多くの場合、天皇（制）に対する確固とした自分の立場が見えないのです。聖なる存在である天皇に連なる人物をゴシップ的に批判することを嬉々として報道している週刊誌やユーチューブがあるというところに、今の日本人社会が抱えている屈折した聖なる存在に対する意識が見え隠れするのです。そのような問題を抱えた社会に復帰することがイエスの癒し業の究極的な目標になっているとはとても考えられないのです。

ある神学者が以前に言ったことがあります。それは、日本でキリスト教の伝道が進展しない大きな理由の一つは、天皇制があるからだと言ったことが思い起こされます。天皇という聖なる存在がある日本でヤハウエという聖なる存在を受け入れる下地がなかなか進展しないということを示したものです。そして、戦後の日本のキリスト教界で真剣に天皇制に関する論議がなされてこなかったことにも責任があります。

話をルカ福音書に戻します。イエスの癒しの物語は基本的に、当時のユダヤ教社会への復帰をもたらしました。もつと言えば、元来の健康な状態に戻すことでした。もちろん、単なる社会復帰ではありません。イエスが見据えていたのは、ご自分と共に到来している神の国の一員になることでした。ですから、当時のユダヤ教の社会に病気が治って社会復帰することではなかったのです。それは、差別意識が厳然として存在しているユダヤ教社会に、その癒された人が復帰したとしても、そのような社会では第二、第三の差別がなされ、断絶させられる人々は次々に再生産されるからです。神の愛が支配する神の国の中で新たに生き直すことが前提になっていたのです。ですから、現代の日本でイエスの癒しの業を捉え直すとしたら、癒された人が神の愛の支配の中で生きていけるような日本の社会を創造する必要がある、癒しの業と同時になされなければならぬのです。少なくとも、社会の一員として、差別や偏見に見舞われている人を神の愛の中へ招き入れるような働きをする責任性があるのです。LGBTの人たちのことも含めて、少数者の人たちが生きやすい社会を創り出すためにも、私たちは召されているという自覚を持たなければならぬでしょう。

ロシアのプーチンに侵略されているウクライナの人たちのことにも心を砕きたいわけですし、今回のクリスマス献金先に北海教区のアイヌ奨学金協力会にも献金をささげました。また、山谷で伝道活動をしている山谷兄弟の家にもクリスマス献金をしました。これらの働きは決して大きなものではありませんが、私たちはそういう少数者と共に、「私はあなたが清いものであることを望みます」という態度決定をいろんな場面で行う必要があると思います。「あなたが罪とされていく縄目から私は解放するように手助けをします」という宣言をしながら、この世の差別を根絶していく働きへと招かれていることを覚えたいと思います。

12節の「御心ならば」と、13節の「よろしい」と訳されているギリシア語には同じギリシア語であるテロー（望む）という言葉が用いられています。イエスも重い皮膚病の人も、清くなることを望んでいるのです。それは自分だけが治ることを望んでいるのではなく、すべての病者が神の愛の支配の下で人間らしく生きていくことができる神の国の到来を待ち望んでいるということです。そのような神の国が到来していることを、イエスを信じる信仰者が率先して創り出していく責任性があることを、癒しのお技を成されるイエスの姿を見ながら決意を新たにしたいと思います。